

メ
ノ
ン
研
究

菊池 慧一郎

メノン篇の中心問題は徳の研究、即ち徳其物なる徳の本體、我々の徳的行爲の根源の探究にあつた而して其探究の結果、其が我々の魂に内在する理性なるを明かなる意識に齎した。我々は其解答に對して重要な意義を認めるのは勿論であるが、我々は其解答が如何なる探究の過程を通つて與へられたか、それより前に其問題が如何なる方法によりて提出されたか、而して其問題が如何なる方法によりて解かれ來つたか、と云ふ其哲學的研究其物の研究に大なる興味を持つてゐる。而して問題より解決への發展的過程を辿り、其結果を自ら求めてこそ、プラトンの結論はまた我々にとりても眞の結果として我々の魂の中に眞の力と生命とを持ち得るに相違ない、また其過程を自ら踏み辿ることによつて、我々の思索の力は眞に磨かれるであらう。

此篇の中心問題は、徳は何であるか、であつた、しかし其探究の過程を自ら辿る時に、我々は徳の問題以上の廣き哲學の世界に接することができ、而して我々は其所

にメノン思想を超越して進展するプラトン哲學の眞の歩みを發見する。プラトンは德其物についての無知を自覺した、此自覺は德の探究に向はしむる、而して探究さるべきものは學ばれ得るものでなくてはならない、學ばれ得るものは認識に他ならない、従つて德は認識でなくてはならない。若し德が認識でなかつたならば學的探究を許さぬもの、探究せんとする志すら起さしめぬものとなつてしまふであらう、而して我々に於ては其に關して全く無知盲目にして、其無知の知すらあり得なくなるのであらう。我々が或ものを探究せんと志す時に、其或ものは既に認識であると云ふ信念が其志の内に動機として存するのである。求めんとする心即ち求めらるゝ對象である。かくて其探究こそ想起である。さてプラトンは德の探究に向つた。而して德即認識なる彼の最一步よりの信念は、德其物の探究の進むにつれて、また認識及び探究に關する一般的問題の洞察をして益々深からしめた。従つて我々は、此篇の思想過程を啻に德の問題を取り扱へるものとのみ觀ることより更に一步を高め、廣く哲學的立場に於て考察すべきである。かくしてこそ我々はそこに懸て偉大なる發展をなすべき思想の尊き萌芽を發見し、また自らも其を培ふことができるであらう。

メノン思想の根幹的探究の道、方法は想起であつた、従つて我々は最もよくプラト

ソの洒落でもないが、其想起の眞意を想起しなければならぬ。此想起につきては此篇に於て全く挿話的にして且神祕的なる叙述を發見するに過ぎないが、しからざる部分に於ても我々は此方法の動きを觀ることが出来る。さて今此篇の思惟過程を大別すると、概徳論、想起論、徳の推理及び正しき思想と認識との關係論の四説となる我々は其最初の二論に於て特に重要な哲學的價値を發見した、従つて此二論を中心となしつゝ、全體の思想發展の過程を茲に辿らうと思ふ。而して此篇の中心問題たる徳に關するプラトンの思想に就ては時々論及すると云ふ程度に留めたい。

△概念論▽

メノン篇の最初に展開せられたる所論は、我々が既に概念論と呼稱したるものである。此所論は中心問題たる徳に關して内容的には其に關する當時の各所説を批判し、其等を排斥しつゝ、徳其物の眞諦を追究せるものであつたが、此内容的探究は其に關する無知の知に導くことをむしろ目的としてゐるに反し形式的には問題としての徳の如何なるものであるか、即ち其形式的性質を闡明してゐる。更に其意を詳細に説明するならば、此探究は、徳とは何であるか *ti estin arche?* 71B. D 特に其本性

につきて其は何であるか：Peri oustias hoti pot estin? の問ひに出發はしてゐるが、其も
 のを、目指し (72c) 答へて以て明かにすべき普遍的である徳其物：auto hoti pct' esti
 to paraplan arete 71 A 卽ち徳の概念、eidos 72c の概念として持つべき諸性質を此上
 なきまでに明かにしてゐる。我々が此所論 (71—79) を概念論と呼稱する所以も亦
 茲にある。

徳の概念の性質の探究は概念一般の諸性の闡明を前提とする、こゝにプラトンは
 極めて卑近の例としては蜂 (72B) 更に色 (74C) 殊に健康、大強等の概念 (72D) 進み
 ては幾何學的概念である圖形 (74) に互りて廣く考察してゐる。我々は先づ我々が
 多者を一つ名目、を以て呼び (74D) 得る根據として、夫々其名目を持つと雖も、中世に
 於ける名目論の主張する所と異り、其は決して單なる名目にはあらざる、其名目の隱
 に潜む概念的內容、意味 (74E: ti pote touto hou touto onoma estin?) に關して其論理的意
 義を明かにせんとせしプラトンの努力の跡を辿り、當篇中心の問題である徳につい
 ての概念論的考察は暫く是を研究の中心に引き入れ、來ることを避け、むしろ一般的
 なる概念論の歸結と其哲學的意義につきて其所説を考究してみやう。

△等自的普遍者 (等自と云ふことは同と同一義である、同と云ふことは異：heter-

on に對して是 touto と云ふことであるが、是は是である、即ち自分が自分に等しい、と云ふ意味に於て特に我々は等自と云ふことばを使用する（プラトンには先づ多様多色なる經驗界の事相に向つた、而してそこに或は健康につき、或は大につき、或はまた圖形につき、或は其他かゝるものにつき、凡てに互り : dia panton 74A 凡てに於て : epi pasin 75A 普遍的なる : kata panton 74B 従つて一様なる haplos 73E 一者 : hen 72C etc. あるを發見した。即ち多様多色なる凡てのものは其に於て : toutoi 72B 何等の差別なくして即ち等しく tauton 72C 而して凡てのものは一つの等しき姿 : hen eidos tauton 72C を持ち、また逆に其姿は何れのものゝ内に : eante en 72E. 73A 在るを問はず、あらゆる場合に等自 : tauton pantachou 72D であることを觀た。此一つにして等自なる姿こそ概念 : eidos であり、凡てのものが其を持つことによりて其である所の本體 : ousia 72B である。

我々は茲に tauton なることばが先づ多者の等互性、換言すれば事々無礙なる平等性をあらはし (72C3 : tauton eisin hapasai) ついで其平等性のみが觀的對象となるに及びて概念の等自性 (72C7. D8) を意味することに氣づく、而してまた茲に一的概念の等自性を保ちつゝ多者に於ける内在の主張をも發見する。しか

し此多即一なる具體的者、またそこに認めらるゝ一者の多者に於ける内在に關する彼の主張はたゞ此概念論の出發點に瞬時の影を見せたのみであつた。プラトンは、先づ多者は其反面に於て一者であると云ふことより出發し、其一者を考察の中心に齎らしたのである、換言すれば其一者に多者が『ひつくりかへつて一つである』普遍性：universitas を認むると同時に、概念の等自的一性の力説に向つた。我々は茲に出發したる概念論に概念に關する思想の發展を見ることが出来る。而して此概念論に於てプラトンが一切努力の究極の目的とせるところは其自體と云ふことを闡明せんとするにあつたのである。

△多者と一者 今等自を意味すると告げたる *tauton* は其語源の意味に於て、中世ラテンの語 *identitas* の根語 *idem* (*is+den eig. der da*) の原意と似て、其自體と云ふことである。プラトンは端的なる其自體を説明せんとして、今も云つた如く、多即一から出發した、かくて其概念論は勢ひ多と一との關係を考察の中心にをき、そこに其自體と云ふことの意義を明かにする方向に進んだ、而して此兩者の關係に於て考察すると云ふことが概念に關する思想發展の動機となつた。さて、互に異なる多樣的多者が等しき一樣的者である、換言すれば差別の反面は平等、平等の反面は差別であ

るところの具體的者を分析して、一方互に等しき姿としての普遍的なる一様の者を一にして等自なる概念として設定する時に、何人の眼も他方特に互に異なる多者の多様性に向けられてゐる。プラトンも亦、概念の等自的一性を力説すると同時に、其にも劣らぬ緊張を以て、多者の多様性 *panodapa* 72B にして夫々 *kath' hekaston* 72A 互に異り *diapherein allelon* 72B 互に對峙的 *enatia allelois* 74D なるを明かなる意識にまで齎した。此分析的考察は茲に多即一の具體者の兩面たる一と多との區別分離に到達した、而して此分離によりて等自的概念の一性は特に明かに打出されて來た。

△一者の超越性 プラトンは此分離よりして更に其同じ性質を縁として兩者の關係の考察に進んだ。今假りに其一的概念の性質を A を以て表はすならば、プラトンは一者は A 的多者を自己の下に把持 *katechein* 74D せる綜合者であり、A 的多者は夫々一者 A に對して制限を持つた或る A *A te* 73E-74B なることを指示し、是に反して一者 A は或る A にあらずして A 其物 *A, das A* であることを明かにした。茲に一者は多者の綜合者にまで進展し來り、而して此關係は必然に考察を一者の多者に於ける内在の思想より一者の多者に對する超越の思想に導く。茲に一者は多者

を超越することによりて其純一性を主張し得るに到る。

△全體性 此綜合者としての概念の一性は、今も云ふ如く、多を超越せる限りに於て、完全なる一性即ち純一性でなくてはならない、而して純一なるものは不可分であり、不可分なるものは内に矛盾を含まざるが故に等自即其自體である。また多者を超越せる純一不可分なる概念は、多の綜合者として、多を自己の下に把持してゐるものでなくてはならない。此純一不可分性と綜合統一性とを兼ねたるものは何か。

其は全體性、に他ならない。茲にプラトンは、其概念論的發展の最後に於て、概念の全體性 .. holon 77 A etc. に到達した。holon はまたその語源 solvon (Latin: saluum) の示す如く健全 : hygies 77 A を意味する。此全體なるものは分割を許さない、分割を許し従つて部分より成立せるものは全體にはあらずして、むしろ總體と云ふべきものであらう。全體的者は勿論其本性に於て純一である。しかし單なる一者は、それが如何に純一不可分であつても、全體的と云ふことはできない、全體は多者の綜合者として多者に對し其を自己の下に統一してゐると云ふ關係に立てるものである。

△普遍的妥當性 さて此全體者は、多を内に持ち、従つて多者の數に拘泥し、左右さるゝが如き、綜合されたるものにはあらざるが故に、多者は數に於て無限であつても

よい。自己の下に統卒さるゝ多者が無限なることを許す全體者は、多者に拘泥せざる方面に則して云へば、プラトンの概念論に於て中心目的として闡明せられんとせざる、其自體 *tauton sive auto kath' hauto* なるものであり、多者に對する關係の方面に則して云へば普遍的妥當性を有するものとして原理である、と考へられ得る。かくて我々は、其普遍的妥當性は全體的概念の綜合性を、其自體性は純一不可分性を意味する、と云ふことができる。横道ながら、我々は茲に、聽てアリストテレスの哲學に於て一の重要な熟語となつた *katholon* の濫觴として見られ得る、未だ一語に結合せざる *kata holou 77A6* なることばを發見する。

△不可分性 プラトンは、先にもまた今も一言したる如く、徳の其自體と云ふことを明かにし、以て其自體なるものゝ本性の何たるかを問題とせんとして、此概念論を展開し來つたのである、従つて其所論の大部分は全體的概念の純一不可分性の闡明に費されてあつた。かくて彼は、或は「物を破壊する者を嘲ける者のよく云ふことばであるが、一者より多を作ることをやめよ」(77A)と云ひ、或は「メノンの部分 *notion* を以て答へたる行爲を評して串戲 (79A) となし、以て全體の純一性の破壊分割 (79A) を警めた。

△部分と全體 さてプラトンが一的概念の全體性に到達するとともに、其全體に對する部分、*.. notion γο* なる思想が現はれて來た。此部分と云ふことは、例へば三つに對する其各々の一つの如く、或ものを分割せる場合、其分割によりて生じたるものを意味するのが普通である。若しプラトンの云ふ此部分にかゝる意味を認め得るとするならば、概念の純一不可分性は否定せられざるを得ない、そのみならず分割され得るものは綜合され得るものとなり、其綜合性は失はるゝであらう。今三つの部分たる各々を取つて考へて見ると、其部分は夫々一つ乃至二つではあるが、其は決して三つ或は或る三つではあり得ない、即ち其部分は三つと云ふ性質を持つてゐないものである。是に反してプラトンがこゝで全體に對して部分と呼んだものは或る「と云ふ制限を持ちつゝ其全體の性質を持つてゐるものである。圖形と云ふ概念は全體であり、或圖形たる圓、三角形、直線等をプラトンは、其ことばの使用の當不當は知らず、部分と呼んでゐるのである。バイドン篇の思想に其の例を求むるならば、三者 *.. τὰς* は全體であり、三つ *.. τρία* は其部分である。即ち全體は部分を内に持たずして下に持つ、換言すれば、部分は、バイドン篇に於けると同様に此篇に於ても發見する、*katechein* の關係、上下從屬の關係に於て、全體に結ばれてゐるのである。プラト

ンは後に而してバイドゥン篇に於てもこの *Katechlein* の關係の逆を現はすものとして多く *metechlein* : *teilhaben* なることばを用ひてゐる、其關係の部分的干與の意味するところは、部分に關するプラトンの眞意の明となりたる以上、また自ら明瞭となるであらう。即ち其部分的干與によつて特殊は普通の妥當圈内に入り、概念的二者と所謂 *Subsumption* の關係に立つてゐると云ふことである。

△本體 さて茲に概念的二者と多者との關係を再び考察して見るに、多者は夫々分割せられたる概念にはあらずして、制限せられた概念であることを認めねばならない。A 其物の制限せられた姿が或る A である。かゝる場合に A 其物は幾多の或る A の本體であると云はれる。かくて全體的概念は其部分的多者に對して本體となる。我々はかく思想を發展せしむることによつて、プラトンが概念的二者を多者に對して本體、*ousia* であるとなした、其思想を明かにすることができた。

メノン篇の概念論に於ける思想の此發展は多者と概念的二者との靜的、關係についての客觀的考察の取つた發展であつて、茲に概念が本體として持つ客觀的純一性と客觀的普遍妥當性が明かにされた。而して此過程と其結果とはメノン思想の

中心目的なる徳其物の客觀的本性、規範的原理を明かにせんとする努力に關係するところ極めて重大であるは勿論である。しかし此靜的關係の考察の發展を以て概念論の一切を盡してゐると云ふことはできない。我々は更に其隱に潛める主觀的にして動的なるプラトンの哲學的思索を窺ひ辿らねばならない。我々は此動的思想を特に概念論の出發點に於て發見する、從つて其研究、考察は、一方如何にしてプラトンが概念的一者の思想に到達し得たか、プラトンの云へば其一者を想起したか、其思想の過程を、從つてまた其一者に關して如上の客觀的考察に進める初一步を、明かにし得るであらう、また他方そこに、やがてプラトンの思想がそこに發展して行く、從つて此篇に於ては尙萌芽に留る思想を指示し、其を培ふことによつて多者と一者との靜的本屬關係を動的因果關係にまで進展せしむることができらる。

△判斷の反省 さてしからばプラトンが多に於て、多を通して等自的一者を把握するに到れる過程は如何なるものであつたか。其過程は多者に於ける判斷の反省による判斷根據の想起に他ならなかつた。今一般的なる形に於て其過程を示す爲に、先に用ひたると同様なる符號を以て説明を試みる。我々は、aはAである、bはAである、cはAである、等の判斷をする。プラトンは此等の判斷を先づ考察の中心に

をき、茲に a b c 等の或 A の多者と A 其物なる一者とを發見し、此兩者を靜的に客觀し、以て先に展開せる概念論を打開したのである。しかしかゝる幾多の判断より A が一者であることを如何にして想起したのであらうか。a b c 等は夫々互に異り、互に對峙してゐる、従つて若し A が a b c 等に左右さるゝものであれば一者とは考へられない。a b c に拘泥し、經驗に執着する限りに於て、ソピスタイと同様に、A についても相對觀に陥るであらう。プラトンはしかるにかゝる幾多の判断に於て、其 a b c 等の主格を無視して「A である」なる賓格のみに向つた、そして茲に A は「A である」判断に對して *pros to A einai* 72E 常に異らずして等しくなければならぬことを發見したのである。此判断の反省は、賓格性を持つ A の一者なるを想起せしめ、茲に凡ては A である限りに於て *hai* 72B 等しく、而して a b c 等が A として互に等しき所以、根據は一者 A の等自性にあらねばならない、と云ふ結論に導いた。

△根源 さて茲に多者と一者とを對立せしめて考察する場合には先に展開されたる如き理論に進みて本體論に結ぶ。しかし我々が尙判断を中心として主格的多者と賓格的一者との關係を考察するならば、プラトンと同様にまた次の事實を發見する。a b c 等は夫々が A であると云ふ判断によりてはじめて A となり、A に歸一

する、換言すれば凡てのものはAなる等自的概念によりて *toti auti eidei* 乃即ち其の故に *δι' ho γιν* はじめてAである。即ち或るAとしてのa b c等凡て或るAはAによりて生み出されたものである、従つて我々がa b c等を問題としてAであると判断し、是をAの下に把握する前に、論理的にはAがa b c等を生み出してゐると考へねばならない。我々は茲に判断の反省によりて想起されたる等自的一者なる概念は即ち判断の設定的、創造的、働きの原理、それこそ後にプラトンが主張するに到れる前提、*hypothesis* であることを認識する。かくて初め多者の本體根、*hypothesis, Grundlage* として靜的に想起されたる概念は實に多者の根づけ *hypothesis, Grundlegung* として動的なる多者創造の原因 *aitia* 即ち根源に他ならない。茲に本屬關係は超越せられ因果關係にまで進展して來る。此根源に關する思想はメノン篇に於ては尙極めて幼稚であることを免れない、しかし其萌芽は明かに見ることが出来るのみならず、よし概念の一般論に於ては尙全く萌芽であつたにせよ、徳の問題に於て、徳的行爲の根源を探究せんとせしプラトンの思想の要素として看過すべからざるものである。

△論理的想起 我々は茲にメノン篇に於ける概念論の一般的所説を盡したる如

く思ふ。而して一者と多者との靜的關係と動的關係との如上の考察により其歸結を要約するならば、靜的に觀られたる客觀的者としては概念は多者を超越せる普遍的妥當の原理であり、多者に對しては其本體根柢となる、また動的なる主觀的者としては多者創造の根源である、かくて茲に主觀的であると共に客觀的なる概念の哲學的論理的意義は明かにせられた。而して我々は創造的根源にしてはじめて是を靜的に本體化して觀ることができると知つた。さて翻つて此歸結に到れる過程をみるに、此歸結は決して突然に想起せられたものではなくて、論理即ち *dialectike* によりて結論されたものである、而して此過程こそプラトンが後に説く學即想起の過程に他ならない。學即想起即ち論理的想起によりてはじめて眞理は打開され來るのである。

△正しき思想と認識 我々は茲に尙前以て一言して然るべしと思はるゝことがある。此根源は、若し我々の解釋を許すならば、想起さるゝ以前に於ては我々の意識として、後に現はれ來る正しき或は眞の思想、*orthē, alēthes doxa* であり、其が論理的に想起さるゝ時に認識、*epistēmē* と成るのである。此メノン篇に於ける正しき思想なるものは、プラトンの思想が論理化し來り、意識的發展が考察の中心外にをかるゝ

に及んで、此篇に於けると同様の意味に用ひらるゝこと殆どなきに到れるものである。其意味に於て是はメノン篇特有の思想とも云ふべきであり、また此思想に對し我々は相當の興味を持つが故に後部に於て別に研究してみやうと思ふ。

△イデア さてまた此概念論の中心的努力は我々が符號を用ひて説明を試み得たるに證しても明かなる如く、概念の内容にはあらずして、其形式の闡明にあつたのである。しかも其形式たるや、決して形式論理の説くが如き靜的な換言すれば全く死滅せる概念の形骸的形式を指すものにはあらずして、實に概念の哲學的意義、其論理的性質に他ならない。世に廣くプラトンのイデア、理想として傳へられてゐるものは實にかゝる論理的性質を持てる概念に他ならない、其概念は幾度か云つた通り、常に超越的な本體たるに留らず、内在的な、判斷の根元、多者創造の根源である

我々は尋で此概念論を前提として、茲にプラトンの徳に關する思想を考察してみやう。プラトンは概念論的過程を通つて最後に全體の徳とは何であるかと云ふ問題を提出した。勿論先にも云つたやうに、此概念論は徳とは何であるかと解を求めたものではなくてむしろ問はるゝ徳の如何なるものであるかについて答へてゐ

るのである、その答へは全體的徳であつた。プラトンが全體的徳と云ふ思想を打出するに到つたのは節制、正義等の諸徳目に對してであつた。而して其等の諸徳は徳の部分即ち或る徳である、而して徳其物を知らずして、如何にして徳の部分を知つてゐると云へやうか (79E) 即ち其等が尙徳であると云ふことを知ることができやうか、我々は先づ徳其物の何であるかを明かに知らねばならぬ、かくてプラトンは徳其物、全體的徳を問題として提出したのである。此所説のみについて考へるならば、此概念論によりて形式づけられたる徳の問題は、恰も其問題解答の例としてプラトンが掲げたる圖形の定義の如き、徳の定義を要求するものであるやうに見える。我々は徳の定義が求められ得るものであるか否かは知らない、しかし我々は圖形の如きものについては、常にたゞ極めて漠然たる意識を持つてゐるに留る、その意識はしかも幾何學者の思惟によつて明かなる意識にまで齎らされる、そして其明かなる意識は其場合所謂る定義として現はれて來る、かくて若し圖形の例に於ても其結果たる定義に注目せず、プラトンが特に *dialektikos* 75 D と云つた開明の過程により多くの意義を認めるならば、我々は徳の問題に於ても、端的に其は定義を求むるものであると解するよりも、倫理學的に徳の明かなる意識に達せんことを要求するもので

あると考へる方が至當であらうと思ふ。

更に我々は概念論に於て根源の思想を見たそして根源にしてはじめて之を靜的に客觀する時に、其によりて生み出されたる多者に對して全體者たり得ることを明かにした。プラトンの求めたるものは此根源的徳であつた。かくて徳の部分として考へられた節制や正義について語る場合に於ても、其等をも根源的に考へてゐる、即ち或る行爲 *: praxis* 79 C が徳であると云ふ場合には、我々は或行爲の様式 *: tropos* 73 B, 78 D に正義的とか敬虔的とか或は節制的とかを加へ *: prosthenai* 78 D なければならぬ、今正義について云へば、凡ての行爲は正義を共ふ *: meta dikaiosynes* 79 C で、即ち正しく行はれたる時に、徳である、かくして正義節制等を徳的行爲の様式とした。而して一般に徳的行爲は其様式の如何を問はず善なる行爲である、茲に一切の様式に普遍なる唯一の徳がなくてはならない、其は何であるか、茲にプラトンの問題はあつた。かくて我々は問題たる徳の徳的行爲の根源、一切の行爲を徳たらしむる徳其物であつたことを知ることができる。而して此徳の根源はまた正義節制勇敢等をも徳たらしむるものである、従つて其根源に出でざる正義節制等は似而非なるものである (88 B) と云ふ思想にまで達したのである。また此根源によりて生

み出されたる各人各様の徳的行爲、更に其等を綜合する正義、節制等と此根源的徳とを靜的に觀るならば、茲に部分と全體との關係をプラトンと同様に考へることもできやう。是を要するにプラトンの探究せんとしたるものは實に根源的徳であつたのである。

我々は茲に概念論を終り、移りて想起論に趣かねばならない。しかし我々は直ちに想起の眞意を問題とする前に、メノン篇に於て概念論より想起論に進む過渡的思想の必然的連鎖を明かにしてみやう。我々は其思想發展の内面的連鎖を形式的面と内容的方面とより辿ることができらる。

プラトンは既に概念論に於て、先づ多者より判斷の反省によりて等自的一者なる概念を明かなる意識に齎し、尋で其概念の形式的意義、論理的性質を理論的に展開した。而して凡て理論的に明かなる意識に齎らす意識の運動をプラトンは學的想起と呼んだのである。我々は既に概念論に於ける哲學的方法の此學的想起であることを發見した。しかし概念論の限りに於て、プラトンは概念の形式の想起をなすつゝも、其に關して特に明かなる意識を持つまでには到らなかつた。此想起の方法を

想起し、是を明かなる意識にまで齎したのが想起論である、換言すれば此想起論に於て哲學的、或は一般に學的方法たる想起が自己自身を想起し、自己自身を基礎づくるに到つたのである。我々はかく概念論と想起論との思想の内面的關係を想起することができる。

プラトンはまた此概念論に於て探究さるべき徳其物の形式的意義を想起することによりて、其問題性を確立した。しかし其何であるかについては、即ち其内容的意義については、其が問題である限り、尙無明である。形式的意義の闡明は、尙内容的意義を明かにし得ないのは勿論である。しかし茲に初めて其無明、其無知が明かなる意識に齎らされて來るのである。かくて概念論の使命は茲に問題の想起にあつたと云ふことができる。概念論が展開されつゝあつた時にメノンは未だ問題を明かに意識し得なかつた、即ち答へて以て明かにさるべき徳の形式的想起が彼にとつて不充分であつた、其爲に彼は徳に關して其無知を知らなかつたのである、而して漸く其の明かとなるに於て彼は當惑 *.. aporia 80* に陥つてしまつた。茲にプラトンは、メノンのアポリアに對する不平を受けて、其眞意を想起し、是を無知の知なる自覺にまで齎した。かくて我々はソクラテスの魂の叫びであつた無知の知を問題の設定と

して哲學の第一線に發見することが出来る。凡て問題、眞に問題と稱し得るものは解かるべきものである。換言すれば問題は自己自身の内に可解性を持つてゐるものである。不可解なるものは問題にはあらずして其自身明かにして、解かるべき何等のXを含まざる自明なるものに他ならない、若し何等かのXを含めることを不可解となすならば、其はピロン學徒の取つた探究斷念の態度、所謂 *epoche* に他ならない。而して問題が解けると云ふことは、無明なる意識が明かなる意識に進展し來ることである、換言すれば問題的意識に於て *implicite* にあるものが *explicite* に成ることである、而して其は即ち想起に他ならない。かくて問題の設定は茲に内容的想起の問題を招來し來らねばならない。我々は茲に概念論より想起論に進む明かなる過程を觀ることが出来る。

△ 想 起 論 ▽

メノン篇に於ける想起論は、徳の問題に對する *aporia* を *euporia* に轉換せしむる爲に、一般的に學、探究の可能を説明せんとする使命を以て現はれ來れるものであつて、哲學的に極めて重要なるものであるが、プラトンは其書出しに於てオルベウス

教徒や其他の詩人ピンダロス等の靈魂不滅の思想を拉し來り、其思想を極めて挿話的なる形に於て展開してゐる。従つて其思想の眞意及び發展を概念論に於ける如く明かに観ることは困難である。我々は此想起論の思想を解釋するに、時にプラトンのことばに拘泥しない考へ方を以てせねばならない。

△ 一般的意味に於ける想起　我々は既に幾度か想起を語つた。そも想起・*anamnesis*とは如何なることであらうか。我々は先づ一般的なる其意味を想起して、然る後にプラトンの意味する想起、即ち學即想起の眞意を探ねてみよう。想起とは云ふまでもなく想ひ起し、想ひ出す意識の自動行爲である。従つて我々は先づ意識について一般的に其行動を考察する必要がある。

我々が何等の前提、何等の假設を持たず、一切の假設、自我と云ふ前提すら放擲して、無前提的に、端的に意識界に飛び込んでみるならば、意識は留るところなき流動であることを經驗する。今此流動の相を分析的に考察としてみると、意識 a につぎて意識 b が現はれたる場合に、それは意識 a が意識 b に成つたのである、換言すれば意識が a より b に變化したのである。今此成りを成らむの状態にかへしてみると、a の意識の内に b の意識が未分に含まれてゐたのである、また其を成つたに於て考察す

るならば、aの意識は自分を解いてbの意識の内に溶け、未分に含まれたのである、ことを知ることが出来る。更にbの意識がcに成り、變化し來つたとすれば、cの意識はbの意識更にaの意識に未分に含まれてゐた、またcの意識にbの意識更にaの意識も未分に含まれて來つたと解することが出来る、同様に意識が無限の流動であれば、夫々の意識は無限なる意識の諸相諸色を悉く未分に含んでゐることになる。凡ての意識は有空の兩面を持つてゐる、即ちaなる意識は其反面に於て非aの意識である、此非aの意識の内には一切が未分に含まれてゐる、即ち其空たるや眞實不虛である、而してその未分なる意識からbの意識が打出し來る時に、aの意識はbの意識の反面たる非bの意識の内に溶けてしまふ。かくの如くにして意識は絶えず流動してゐる。

此流動的意識の分析的考察を更に進める時に、諸色諸相の意識と其反面たる空的意識即ち一切諸色を未分に包藏せる意識とが區別せられ、後者が前者の前提として考へられて來る。此前提的意識は即ち可能的意識であり、靜的には本體として、更に進んで動的には根源として現はれ來る。此一切諸色を未分に含む前提的意識こそ想起的行動たる意識に他ならない。プラトンも亦想起的行動の前提としてかゝる

可能的意識を前提としたやうに思はれる、即ち「魂は此世にあるものまたハデスにあるもの一切を觀た、従つて知らなかつたものは何もなく」(81C)「一切は同族にして魂は一切を知つた」(81D)と云つた其魂 : psyche は前提的意識を意味してゐると解することができる。此可能的前提的意識は一切の諸色を自己の内に包藏し、而して自己の内より打開し、打出し來る根源的意識に他ならない、其自己の内なるものを打出する其意識の運行こそ我々は是を想起と云ふことができる。即ち想起とは、プラトンが註せる如く、意識が自ら自らの内なるものを掴み出す : *analambanein* 85D 自己打開の行動に他ならない。かゝる創造的意識を前提として立てる時に、aよりbへの意識の變化は、意識がaを打開し尋でbを打開し來れる想起的過程として説明される、かくて同様に不斷の意識的變化もまた、恰もバイドン篇に於てケベスによりて提示されたる、魂は絶えず肉體を織つて行くと云ふ、ピタゴラス學徒の織匠の思想やまたシムポシオン篇に説かれたる絶えざる創造、生産のエロスの思想の如く、此前提的意識の創造的發展として考へられ、其創造的過程は想起的運動として説明し得らるゝであらう。而して此創造的進展は、例へばaよりbへの變化は、其が全く偶然的であつても、そこには偶然、必然の對立を超越せる必然性、即ち前提的意識の内面

的必然性が働いてゐるのである。我々は極めて一般的なる想起の意味を茲に發見することができる。

△學即想起 プラトンは此想起の意味を更に限界し、偶然的想起に對して必然的想起のみを考察の中心に置き、茲に學即想起の思想を説いてゐる。學即想起とは意識の理論的發展を意味する學問的方法である。プラトンは前提的意識の内なるものとして、先にも告げたる如く、特に二様のものを數へてゐる、即ち此世のものと而してハデスの内なるものと、プラトンは特に後者の想起を説いてゐると云ふことができよう。彼は恐らく此ハデスの内なるものに、ハデスの語源 *a-vid* (*idein*) 不可視的者の示す如く、此世のもの即ち經驗的なる對象に對して超經驗的なるイデアイを意味せしめてゐると解することができる。それは兎も角としてプラトンの特に語らんとせる所は、萬有の眞理の魂に於ける内在 (86 B: *he aletheia hemin ton onton estin en tai psychai*) にあつた。かくてプラトンが探究、學と同一義となした想起 (81 D: *to zetain kai to manthanein ananthesis holon estin*) は眞理即ちイデアイ即ち認識を意識が自ら自らより擱み出す (85 D) ことであつた。換言すれば前提的根源的諸概念の想起であつた。しかも其意識活動はやはり根源的意識の自己認識自己打開の創造的想起に

他ならない。想起と云ふことを此前提の想起と云ふ意義に限定して考へるならば、其想起はイデア打出の方法として思惟の創造的發展であり、此思惟の活動は必然的想起即ち哲學的論理 *dialectike* に他ならない、此哲學的思惟の歩みにより、歩みの中に可知的者は明かなる意識にまで齎らされて來る。プラトンの主張する學即想起の眞意は實に此哲學的推理を意味せるものであつた、而して此推理は懸て前提的意識其自體を極的イデアとして打出し來らねばやまない。プラトンのポリテイア思想にまで進展する中期思想の萌芽はこのメノン篇の想起觀に誕生したと云ふべきである。

△問題的意識 我々は茲に想起と云ふことが意識即魂が哲學的推理によつて自己の内なる眞理認識を掴み出す學問的方法なることを明かにした。さて其到達し把握され對象化さるゝ認識の内容は其を明かなる意識に齎らさんとする推理の前に先づ問題でなくてはならない、換言すれば哲學的推理の道に自己認識、自己打開の運動をなす意識は其運動の終極に於て認識であり、其運動の出發點に於て問題的意識である。而して其問題的意識は自己の内面的必然性によつて自らを解いて以て認識となる、其自己解決に向ふ問題的意識はしかし其自解への傾向を除外して其自

體には盲目的な無自覺なる意識に留る、しかも其意識が形式的に想起されて無知の知なる意識にまで自覺し來れる時に、茲にはじめて問題的意識となつて來る。我々の解釋にして許さるゝならば、プラトンはかゝる意識を呼んで正しき思想と稱した。此正しき思想と認識との關係に於てプラトンは想起の意義を更に明かに限定してゐる。かくて我々は先づ其所謂の正しき思想について考察してみよう。

△正しき思想 さて正しき思想 *orthodoxia* とは如何なるものであるか。一般的に思想と云はるゝものは思ひの相である、その思ひとは例へば或ものを美と思ふ、四角と思ふ、と云ふ場合に味ひ得る如く、意識の一つ働きである、其作用によつて打開されて現はれた意識が即ち一般に云ふ思想である而して思ふと云ふ働きが其内容について眞偽の斷定を控へてゐる未定判斷に過ぎざる如く、思想も其自身に眞偽の證を持ち得ないものである。是に對して理想とは、理論 *logos* によりて打出された意識なるが故に、其こそ眞偽を超越して其自身に眞性の證 *logos* を持てるものである。正しき思想も思想なる限り自身に理證を缺いてゐるものであると云はねばならない、従つてプラトンはシムポシオン篇に於て、メノン篇に於けると我々の見る所全く同義なる、正しき思想を無證即無理なるもの *alogon pragma* となし、是を無

知ともまた知識、認識とも區別して、しかも其中間に來るものである (SYM. 202 A) と説いてゐる。さて一般に思想なるものは眞僞未定なるものであつて、しかも若し其が何等かの理論的根據を得て眞と決定せられたる場合には、其は既に思想の段階を超えて認識となつたのであるとするならば、思想にしてしかも尙常に眞であり正である主張するが如き、眞なるまた正なる思想 : *alēthes kai orthē doxa* は一般的意味に解さるゝ思想とは區別されねばなるまい。しからば其は如何なるものであらうか。

我々は此正しき思想なることばと共に此メノン篇に於てもまたシムボン篇に於ても其動詞形なる *orthōs doxazein* MEN. 98 B, *ortha doxazein* SYM. 202 A を發見する。此 *doxazein* とは先にも一言したる、思ふと云ふ意識の働きである。此思想的判斷によつて表象されたものが即ち一般的の *doxa* である。而して我々がシムボン篇の同じ所に於て *ortha doxazein* とは理證を與へ得る能力を缺いてゐる。(ancu tou echēin logon dounai) ものである。従つて認識 : *epistasthai* ではないと云ふ説明を發見する如く、此動詞形を名詞形にせるドクサは思想的判斷其物と云ふ意味に解し得らるゝのである。例へば「大きいと思ふ」と云ふが如き思想的判斷の資格的方面

だけを考へてみると、其思想的判断活動の根源として大と云ふ意識を發見する、若し魂に大と云ふ意識が全く無いならば、或ものが大であると思ふと云ふ思想的判断は成立し得ない。即ち、大きいと思ふと云ふ思想的判断があるならば、其活動の根源として意識の内に大と云ふ思想が内在してゐなければならぬわけである。此思想、此根源的思想こそ眞偽を超えて眞にしてしかも尙思想なるものであると云ふことができよう。我々はプラトンの所謂眞なる思想の下にかゝる根源的思想を解せんとするのである。

我々は茲にプラトンと同様に眞なる思想の魂に於ける内在 *enchainai* 85C を明かにした。此内在と云ふことは未分的意識を打開して對象したる後に此を再び收めて見た言ひ表はし方である。眞理が魂に内在すると云ふことも、眞理を打開したる後でなくては明かに主張することはできない。正しき思想の内在と云ふことも、其が意識の自己打開の想起によつて對象化せられて後に意識さるゝ事實である。しからば此正しき思想は如何なる風に想起され、對象化せらるゝのであらうか。其想起は、其正しき思想の正しさが根源的と云ふ形式に基くごとく、何とは知らねどもかかるものでなくてはならないと云ふ、形式的想起であらうと思ふ。此想起は若し譬

へ得べくんば數學の問題に面してXを含める等式を構成するが如きものであると云ふことができよう。其はとにかくとしてプラトンは此正しき思想の打開せられたる、状態を叙して「恰も夢の如く今や掻き起された」(85C)と述べてゐる。想起を學即想起に限定したるプラトンは正しき思想については想起の代りに搔起 : *anakinēin* なることばを用ひてゐる。かくて搔起されたる正しき思想はなほ暗き意識であつて其何であるかの明かなる知識を缺けるものである。此暗き意識は其が何であるかと云ふ自問より自己解明に向つて進展せんとする意向を持つた時に、其は問題意識となるのである。問題意識とは自分が自分の無明無知を知り、自己を問題として自ら解けんとする意識に他ならない。而して其意識が自分を解いて明かなる姿に自己を打開し來る時に認識と成るのである。(86A : *alētheis doxai, hai erotesei epē gertheisai epistemai gignontai*)

△理論的結び 正しき思想が認識に成る其想起的過程を我々は先に理論的推理であると告げた。今やプラトンは此思想を打開して來た。正しき思想は論理的發展前の意識なるが故に *alogon* である、夫が論理的展開によつて打開し來る時に其意識は認識となる、従つて兩者の區別は有理か無理かに於て立てられる。此有理的

意識をプラトンは理由の思惟、*aitias logismos* 即ち理論的根據を明示する思惟を以て結ばれたるものであり、此理論によりて結ぶこと、即ち想起である、正しき思想は理論によりて結ばれて茲に認識と成る、従つて正しき思想より認識の異なる點は此結び、*desmos* である (98A) と推論し、かくてまた自ら其想起思想を結んでゐる。問題が解けると云ふことは理論的に結ぶと云ふことである。かくて我々は認識は理論的結びの所産、即ち結論 *to symbluton 97B* であり、問題の意識は其結論に達する出發點なる前提 *Hypothesis 86E* であり、此結論に進展する前提の運動こそ學問的方法たる想起である、と主張することができよう。而して問題を與へられたるものとなし、方法を是に對立せしめ、よつて先定的に或る立場を築き、是より問題を解かんとせず、端的に問題を前提となし、自解の理論的方法によりて眞理を打出せんとする努力こそ無前提的なる哲學的思索と云ふべきである。

△定住性について プラトンは正しき思想が理論的に基礎づけられたる時に認識と成る、其が想起である、と説いた。而して「正しき思想は先づ *prōton men* 認識となり、茲に定住的 *epaita nomimoi* となる」(98A) と云つて、茲に新なる認識の性質として、魂に於ける定住性を數へてゐる。此定住性の意味するところは不生不滅的實

在性であつて、我々は是を超時間的に思惟によりて對象化されたる眞理の永遠不變性と同一義に解することは困難である。此定住性の反對としてプラトンは現滅的斷續性を掲げ、是を正しき思想に認めて「正しき思想は永き時間現在し留ることを欲せず、魂より脱走する」(98A)と云つてゐる。而して先の理論的結びの結びと云ふことをプラトンは、正しき思想の現滅的運動を阻止し、是をして不動に留まらしむると云ふ主張にかけてゐる。しかし理論は意味を限定し、超時間的に爾るを明かにし得るものではあらう、しかし不生不滅的實在にまで結び得ざるものである。プラトンも此難點を知つたのであらう、彼は此主張の後を受けて、其を單なる想像 *oikazein* となし、従つてまた理論的結び即想起の思想をも犠牲となし、其關係比較は兎に角として正しき思想と認識とは異ると云ふことをのみ強く主張し、是は我が貧しき知識の中に於て尙其一つである (98B) と語つてゐる。其がしかし知識である以上、單なる思ひつきであつてはなるまい、其は尙理由を必要とする、而して我々は其理由を先にも説ける如くやはり理論的結びに於て見出し得るのである。

我々は茲に此メノン研究の目的とせる概念論と想起論とを先づ一通り片づけた、

かくて此研究を茲に閉ぢてもよいと思ふ、しかし尙徳の問題に關する負債をしはらはねばならない。極めて簡單にそれについて一言しよう。

我々は既に問題たる徳其物の形式的意義については考察した、従つて其内容的意義についてのプラトンの到達したところを一瞥する必要がある。プラトンは其概念論の初めに於て、人々は同一方法 *.. en autai tropoi* 73C によりて善であり、善となる、其爲には徳は唯一でなくてはならない、と告げてゐる、而して其徳其物の何であるかにつきて無知の知に到ると共に、哲學的精神はあらためて其探究に向つた、其探究は茲に徳は善、其物、*.. agathon auto* 87B である、と云ふ前提に出發した。善其物とは一切に價値を與ふる眞の價値、價値の根源に他ならない。プラトンは此前提より出發して普遍的妥當性を持つ徳其物を求めた、而して是を理性 *.. nous* 88B 其理性を體得せる意識即ち智慧 *.. phronesis* 88C に想起した。かくて「徳は即ち智慧である」と結論してゐる。茲に徳の認識は確立された如くである。しかしプラトンは此推理に於て或は「あらねばならない」或は「此理論上等のことばに於ても明かに見得る如く理論的に徳の眞理を打開せんと努力した、それにも拘らず其結論とも見らるべき最後の判斷に於てなほ一分の隙を遺してゐる、即ち彼は次の如く云つた、『我々は徳を智慧

である。曰ふ、或は全般的にか、或は部分的にか』(89A)と。我々は此結論を見る時に徳に關する推理の未だ不充分なるを主張せざるを得ない、しかし其不充分の中にも我々は尙プラトンと共に徳は智慧に所在すると云ふこと、其は理性を缺いてはならないと云ふことだけは明かに意識することができる。實際プラトンの思索に於て徳の本性の理論的打開はゴルギアス篇に於てなされたのであつた。

さてかくして推理され想起され得る徳の眞諦は學即想起なる、決して習慣上 *po tou ethous* 82A の興へまた貫ふと云ふ意味にはあらざる、しかも其こそ眞の、學びまた教への對象となり得るものであることは明かではなくてはならない。しかもプラトンは徳の教へられ得るや否やの問題に面接し、翻つて自ら徳の教師たる看板を掲ぐるソピスタイはもとより、古來高德を以て聽えたる賢人偉人すら徳を特に自らの子供にすら、教へ得なかつた、従つて徳の教育者なしと云ふ事實の前に、それも全く今迄の事實を據證として、一見理論上到達し得たる徳即認識の解決を放棄したるが如くであつた。しかし理論的結果は單なる今迄になかつたと云ふ事實の脅威を受けて直ちに動搖し、否定さるゝ程根據の薄弱なものではあり得ない。プラトンも如何にして此理論的根據、それこそ眞の根據を持てる認識をかゝる事實の前に犠牲と

し得られようか。茲に彼は教へ得ざりし、また得ざる徳の批判に突進し、終に其を理性を缺ける… *anem non sois* 即ち理論的根拠を缺ける、先に論じたる正しき思想に發見し得たのである。

しからば此徳の正しき思想は如何なるものであり、如何なる働をなし、また教へ得ないとするれば如何にして人々に來るか、の問題についてプラトンの答へを考察してみやう。正しき思想は勿論尙暗き漠然たる意識である、しかし其正しさの故に人々を正しく導くことができる、其正しき思想の動く所常に、正しく當てる、或時は當り、或時は目的をはずすと云ふが如きことではない、従つて導者… *hegemon* としては正しき思想と雖も認識に劣らぬものである (97) とプラトンは説いてゐる。かく考へることによつて茲に價値の同異の問題を起し來るのは當然である。此問題に對してプラトンは認識の定住性に對する正しき思想の現滅性を以て答へた。正しき思想は魂に出沒する、従つて正しき思想は其が現はれ留まる間は、よきものまたあらゆる善事を作り出す、しかし軀てまた去つてしまふ (97a) ものである。此解答は、先にも一言したる如く、想像として其眞理性を保留された、しかし兩者の有理か無理かの區別は立てられてある、即ち正しき思想は理性を缺けるもの、理性のみ眞の價値なるが

故に、價値なきものである、と云はれねばならない。而してプラトンは學即想起、理論的發展のみを意識の自力的行爲となしたるが故に、かゝる或はづみから *apo tyches tinos* 正しく現はれて來るものは、人間業を以てして招來し得ざるものである (99) △) 即ち教へられまた學ばれ得るが如きものではあり得ない、となし、是を神業に歸した。しかもプラトンはかゝる、正しき思想によつて正しき行動に出づる者は、豫言者、巫子更に詩人と異なる所はない、彼等は神憑 *enthousiasmos* によりて多くの眞なることを告ぐるも、自ら告ぐる所については全く無知である、と説破した。理性を缺きて尙正しき行爲に出づる者はかくて實に神の *theios* と呼ばるべきものである、而してかゝる徳は全く神の授與により *theiai noia* 理性を要せずして來るものである。而してプラトンはかゝる徳に政治家的徳を意味せしめた。(99) 偉大なる政治家、神的政治家は全國民を正しく導くことはできる、しかし無知なるが故に他者をして自らの如くなすことはできない。正しき思想、其はなほ徳の盲目的衝動として解し得よう。神的話は如何にも美しく響く、しかも其美しき姿の裏には盲目的と云ふ譏りの影が伴はれてゐる。

さて今迄には徳の教育者はなかつた、而して其は何人も徳の認識を持つてゐな

つた、たゞ正しき思想によりて行動せるに留まつたからである。茲にプラトンは、先にも論せる如く、正しき思想と認識とを、最も力強く最も明確に、殆ど其のみが全探究の唯一の結論であると云ひ得る程に、有理と無理とに於て截然と區別するに到つた。茲にプラトンは其理論的結果を前提となし、若し眞の徳に生き、よりて他者をも徳に教育し得る者あらば、

恐らく其者は生ける人々の間にありて、ホメロスの歌へる、死者の中に於けるテイレシアスの如き者である、と云はれよう。詩人の告ぐるには、ハデスの中なる者の唯一人彼は知力を持つ、他者はたゞ影の如く浮游す、と。此世に於ても全く同様に、かゝる者は徳に於て恰も影に對する眞なる物の如くである。(100A)と叙するに到つた。

我々は茲に徳も幸福も善も悉くを唯神の授與に待たんとする他力的信賴の排斥、而して是に代ふるに魂自身の力によりて善を求め、是を體得することによりて徳に生き、以て自ら自らを救はんとする、自力的哲學の提唱を聽く。更にまた我々はメノン篇の全論を一貫して流るゝプラトン思想に理論の優位を洞見し、而して到るところに哲學的勝利の凱歌を聽く。

我々は哲學的中心思想としての概念論と想起論とを中心としてメノン思想を其最後まで辿つて來た。而して我々は其最後の一節に於て再び德其物の研究の必要を説くを聽く、是れ其德の推理の未だ充分ならざるを語るものである。かくて我々は此篇の使命を德の被學性乃至は其に基く德探究の可能性の基礎づけにあつた、と斷定することが出来る。即ち當篇に於て解決されたる問題は、德とは何であるか、と云ふよりは寧ろ、劈頭に掲げられたる諸問の中の、德は教へられ得るものであるか、とあると云ふことが出来る。而して教へられ得る : didakton と云ふ性質を持つものは、プラトンの正當なる換言の示すごとく、學ばれ得る : matheton 70A ものである。此問題に面接してプラトンは、教へられ學ばれ得ると云ふことは德の性質 (71B) である、故に德がかゝる性質を持つてゐるか、否か、を知る爲には、德其物の眞諦を知らねばならないと云ふ所信の下に、先づ德其物の考察に向つた。德が被教性乃至被學性を有するや否やの考究の前に、德其物の闡明が必要であると云ふ、此問題に對する顯はなるプラトンの主張は、最初 (71B) に於て、中程 (86D) に於て、而して最後 (100B) に於て、即ち全篇を通じて是を知ることが出来る。しかし德其物の探究の必要は、其可能性を前提とせねばならない、而して其可能性は唯一に懸りて德の被學性にあり、

被學性を有する徳は認識に他ならない。茲にプラトンの表面上の主張の奥深く隠されて、メノン思想の哲學的根本問題は學即想起論に潜んでゐることを發見する。我々は學即想起論に於て探究の意義方法、其こそ哲學的方法を知つた。プラトン思想の哲學的發展の萌芽ははじめて茲に眞に萌したと云ふも過言ではあるまい。